

わらべの館あり方検討委員会（令和の童話の里づくりを考える会）

答 申 書

I 検討委員会への諮問内容（わらべの館検討委員会設置要綱第1条）

玖珠町教育委員会は、令和5年8月18日、開館後40年を経過したわらべの館の今後の在り方についての改善策を求め「わらべの館あり方検討委員会（令和の童話の里づくりを考える会）」を設置した。委員会への諮問内容は「わらべの館検討委員会設置要綱第1条」に次のように記されている。

（目的）

第1条 わらべの館は経年による老朽化が進むとともに、運営面でも開館時の目的からの乖離もみられ、その対応等が喫緊の課題となっている。これらの課題を解決するため、今後のわらべの館の在り方や有効活用などについて広く意見を聴取するとともに、現施設の改修について調査・研究するため、わらべの館あり方検討委員会を設置する。

本委員会には、広く意見を聴取して調査・検討に基づいた次の2点についての提言を求められた。

- （1）わらべの館が有効に活用されるための在り方
- （2）老朽化した施設の改修

II 検討結果

1 わらべの館の現状と利用者のニーズへの対応

わらべの館あり方検討委員会では、令和5年度に町民と利用者にアンケートを実施し、利用の実態やニーズの把握を行った。

結果、利用経験者の約7割が図書室の利用、3割がイベントへの参加であり、日常的な利用の大半は図書の利用であるということや、利用者の満足度については、満足・やや満足という層が多く、特に図書室のサービスに関しては満足度が高いということが分かった。

また、未利用者の利用しない理由で一番多いのは「遠いから」であったが、「興味のある行事などがない」「子どもや孫がいないから」という回答も多く、わらべの館は名称から「子どものための施設」という先入観もあることが分かった。

どのような空間があれば利用したいかという設問では、「お茶が飲める」「大人も使える」など利用の形態に応じたスペースの確保や、ネット環境、駐車場、トイレなど快適に利用するための環境の改善を求める声も多くあった。

一方、行政からのニーズとして、開館後40年を経過し、大きく変化した周辺環境等に対応するため、まちづくりにも資する「令和の童話の里づくりの中核施設」という新たなコンセプトが求められており、隣接する久留島武彦記念館との一体的な運用をすすめるとともに、老朽化した設備の更新・近代化に取り組む必要性があることも確認した。

以下、「2 さまざまなニーズや新たなコンセプトに対応する具体的な方策について」において5項目について具体的な方策を提言する。

2 さまざまなニーズや新たなコンセプトに対応する具体的な方策について

令和6年度の協議では、中間報告書に明記した町民や利用者そして行政からのニーズの確認と新たなコンセプト（あり方）に向けて、対応する方策を個別に協議するとともに、先進地視察を行い具体的なイメージを共有する中で最終的な検討を行った。

以下に個別の具体策を示す。

（1）利用者の求める「欲しい空間」への対応

利用者アンケートで明らかになった図書室に欲しい機能（大人も使える空間、学習スペース お茶が飲める空間）については、利用者の年齢層や利用目的等に対応した空間で、公共図書館においても、そういったニーズに配慮した空間づくりを目指してきている。

一方で、わらべの館の図書室は当初のコンセプトから児童図書室として設計され、子どもが自由に本を読めるよう全面カーペット敷きで床暖房もあるキッズスペースとなっている。

現状として、大人が静かに本を読む空間は特に設けておらず、学習スペースも学童の利用を想定した家具や配置になっている。また、お茶が飲める区画を作る空間的な余裕もない。

○テラス席の増設

建物の南側にある図書室テラス部分は十分な空間があり、そこをテラス席として増設し、キッズスペース以外の3つの機能を共有する空間を確保することで、利用者のニーズに対応することができる。

（2）利用者から要望があった改善が必要な点への対応

① 駐車場の確保

わらべの館の専用駐車場は、町道を隔てた隣接地にあり、20台の駐車スペースがあるが、絶対数が不足しており、平常時はもとよりイベント開催時は近隣の三島公園の駐車場や町有地（ゲートボール場手前）三島グラウンドなどに確保している状況となっている。

隣接する久留島武彦記念館についても、専用の駐車スペースは殆どなく（5台）、来館者の大半が三島公園の駐車場を利用しており、高齢の来館者も公園駐車場からの急な坂道を往復している。また、観光バス等の大型車両の多くは、少し離れた町有地（ゲートボール場手前）に駐車している状況である。わらべの館が新たなコンセプトの中で、ワンストップの発信拠点としての機能を果たすためにも、両施設に隣接し多くの台数が駐車できる広さがある三島グラウンドに確保することが望ましいが、未舗装で水はけが悪く雨天時はぬかるむため、現状では駐車場としての利用は厳しい。

○三島グラウンド内に駐車場を新設する。

三島グラウンドの一部を舗装すれば、十分な台数の駐車が可能となり、観光バス等の大型車両の駐車スペースも施設の近くに確保できる。また、久留島武彦記念館との一体的な連携を進めるうえでネックとなっていた施設間を繋ぐ通路も併設が可能であり、新たなコンセプトでは非常に重要なインフラとなるため、整備することが求められている。

*付帯意見 … グラウンドの一部を駐車場にする場合、グラウンドの排水機能を高める土壌改良、加えて近年の豪雨に対応した防災機能を持たせた公園周辺の整備が必要である。

② トイレの改修

わらべの館のトイレは 40 年前の開館当時の古い設計で、一部の便器は洋式化しているが、和式便器が大半（14 基中 10 基）であり、現代の生活様式に合わない状況になっている。

また、床にはタイルを張っており、洗って清掃するため勾配や段差もあることから、高齢の利用者には転倒の危険性があるうえ、湿気も多く不衛生である。利用者にとって非常に使いづらい状況であり、経年による故障も多く発生していることから早急な改修が必要である。

○トイレの全面的な改修

基本的に洋式化するとともに、床清掃に水を使わない乾式のトイレへ変更し、段差を解消（バリアフリー化）することが必要である。

（3）新たなコンセプト「令和の童話の里づくりの中核施設」に向けての改修

わらべの館の新たなコンセプト「令和の童話の里づくりの中核施設」として機能するためには、情報発信機能が必要となる。

近隣にある森の街並みや集積する文化財群の散策、角牟礼城登山、久留島武彦記念館そして町内全域の魅力を情報発信しそこに導いていく機能である。

そういった情報を映像等で発信する機能は、以前は視聴覚室が担っていたが、現状は豊後森藩資料館の展示スペースとして使用されており、40 年前は最新鋭であった視聴覚機器も経年による劣化で現在は使用不能となっている。

一方、視聴覚室にある豊後森藩資料館も「貴重な資料が簡易に展示されている」状況であり、適切な展示スペースに移転できれば、視聴覚室は新たなコンセプトに対応できる空間としてリニューアルが可能となる。

○展示の見直しと条件整備

清田コレクションと森藩資料のこれまでの展示方針を見直し、企画展や季節展示などを行い、展示点数は減少するが「価値ある・誰にもわかりやすい展示」にすることで、展示室に両方が展示可能となると考える。

展示スペースの充実のためには、専門的な知見が必要であり、展示をしきれない資料の適切な保存と管理も必要となるため、学芸員の対応や収蔵施設の確保が必要（前提）となる。

○情報発信に係るソフトや機材の整備

発信する映像ソフトは、これまで外部から問われても明確に回答することが困難であった「童話の里とは何か」というまちづくりの基軸を説明したうえで、わらべの館の周辺部や町内の観光地等へ誘導するものとなるため、今後議論を重ねながら質の高いものを作り上げるとともに、情報発信のために整備する視聴覚機材（プロジェクター、スクリーン、音響機器等）は、リニューアル後の多様な発信に対応できる設備を導入することが必要である。

○関連施設の整備及び全体的な改修

グラウンドの駐車場整備とともに、新たな駐車場から直接入館できるエントランスの施設の整備も求められる。施設の部分的な改修ではなく、図書コーナー、展示コーナー、そして童話の里のインフォメーション機能等を含む館全体の施設改修をするべきである。

(4) 久留島武彦記念館との一体的な連携を

「令和の童話の里づくりの中核施設」として、隣接する久留島武彦記念館と連携し一体的な運営を行うことも必要である。

具体的には、手狭な久留島武彦記念館が、わらべの館の施設を使えば大規模なイベントが開催可能となるほか、わらべの館が所管する森藩の資料等の展示について、久留島武彦記念館の専門的な知見を活かせばより魅力が高まると考えられる。

また、両施設の職員が一体となって事業を行えば、運営の人員的にもスケールメリットが生じるため、それぞれが不足していた部分を補完する形で、諸事業の充実が図られる。

○組織の改編と施設間を繋ぐ通路・駐車場の整備

一体的な運営のためには、運営する組織の改編や、運営にあたる職員数を確保するとともに博物館的な知見を持った職員（学芸員）の配置が必要である。

また物理的に、施設間を繋ぐ通路や、絶対数が不足する駐車スペースの整備が必要となる。アンケートの改善ニーズの中でも述べたとおり、両施設の間にあり段差なくアクセスできる三島グラウンドを舗装し、大型バスを含め十分な駐車台数を確保することで、両施設へのアクセスと利便性が大幅にアップするため、連絡通路と一体的に整備することが必要である。

※付帯意見

既存のわらべの館駐車場については、図書室の利用者専用駐車場として住み分けを行うことによって、イベント時でも図書室利用者の利便性は担保できる。

(5) 老朽化した設備の更新と近代化

① 冷暖房設備の更新

わらべの館の冷暖房設備については、開館後 40 年間で都度更新してきた経過もあるが、現状として経年による不具合等がある機器も多い。

○老朽化した機器の更新

故障や機能の低下がみられる図書室のエアコン一式と、一般的な耐用年数を大幅に超過している床暖房用のボイラーの早急な更新が必要である。その他の冷暖房設備についても不具合が出る前に計画的な更新が必要である。

② その他の設備・備品の更新（近代化）

わらべの館大座敷のステージ関係（音響・照明）設備・備品については、現状で使用可能な状況ではあるが、サークル活動の発表等のイベント時には演出の要望に応えられない部分もある。また、大座敷の北側一面にある板戸は、意匠的には大座敷のイメージに沿ったものとなっているが、材質的に遮音性に乏しいため、「語りべの会」など静かなイベントでは、外部からの騒音が進行上の支障となっている。

○大座敷の音響設備等の近代化と改修

多様化した音源に対応するため、老朽化した音響機材の近代化や、ワイヤレスシステムのチャンネル数の増設、ステージ前方からの照明（光量）が弱いこと上部のスポット照明の改善等が必要である。

また、北側の板戸部分については、外部からの騒音を遮断する防音改修が必要である。

3 「令和の童話の里づくりの中核施設」となるために

今回、答申する新たなわらべの館のコンセプト（あり方）は、これまでの社会教育施設に加えて、観光や地域振興まで含んだ積極的な発信機能を持つことや、久留島武彦記念館との一体的な運営で、武彦翁の顕彰施設としての位置づけも加わるため「令和の童話の里づくりの中核施設」と位置づけなければならない。

もちろん、新たなコンセプトの施設となっても、従前どおり児童文化の普及や、児童生徒に対して豊かな体験活動を提供するとともに、公共図書館的な機能を果たし、児童文化サークルの活動拠点であり続けなければならないが、従来の社会教育施設という範疇を大きく超えた「まちづくり施設」への転換となるため、大胆な組織の改編と、施設の機能と役割に見合う職員数、特に学芸員など専門性を持った職員の配置が必要となると考える。

また、運営にあたっては、関連する団体（観光協会、まちづくり団体、福祉施設など）との連携によって、土産品の販売や飲食の提供など、利用者の視点に立った施設の魅力を上げる取組についても、あらゆる可能性の検討を継続するとともに、新たなコンセプトに相応しい施設の名称（もしくは愛称）の検討についても、幅広い意見を求める中ですすめていくことが必要である。

III あとがき

わらべの館あり方検討委員会では、令和5年8月から2か年の協議を通じて、わらべの館の現状とあるべき姿について、町民や利用者へのアンケートや行政の意向を調査したほか、様々な角度から検討を進めてきた。

その中で、社会教育施設としての地理的な弱さや、開館から40年を経過し老朽化した施設の問題、そして旧久留島記念室にあった久留島武彦関連史料の移転など、昭和59年開館当時のコンセプトから乖離した経過も明らかになった。

また、わらべの館周辺の状況も大きく変化し、本町通り・寺町通りの町並み整備や旧久留島氏庭園や角牟礼城址など集積する文化財群の整備、隣接地への久留島武彦記念館の設置など、それぞれが確かな魅力を持ちながら、繋がりを欠いている現状も分かった。

わらべの館のそういった課題や現状を踏まえ、今回われわれが提言する新たなコンセプトは「令和の童話の里づくりの中核施設」である。

現状の施設を利用者等のニーズに沿って改修し、情報発信など新たなコンセプトに見合う機能と人員を整えるとともに、久留島武彦記念館との一体的な運用の中で、わらべの館周辺そして町内全域の魅力を繋いで高めていく「まちづくりに資する施設」を目指すものである。

この今までにない施設に生まれ変わるには、従来の縦割りにとらわれない柔軟な組織の改編と、関連する民間組織との連携に加え、令和の童話の里づくりに対する町民の機運を醸成する取り組みも必要である。

最後に、このあり方検討委員会が役割を終えた後も、実現に向けた新たな枠組みでの協議が続けられることを切に願うとともに、これまでの協議が、町民の主体的な町づくりへの参画と地域の活性化に繋がることを心から祈念するものである。